

西北区工業合作運動関係者に対するインタビュー

—抗日戦争時期、国共内戦期、そして現在—

きく ち かず たか
菊 池 一 隆

はじめに

- I 西北区「工合」旧会計担当者・方逸民氏に対するインタビュー
- II 抗日戦争時期、国共内戦期の宝鶏「工合」旧社員・見習工に対するインタビュー
- III 「工合」発展形態としての大規模集団工場・宝鶏製靴廠
- IV 現在の陝西省の「工合」運動

はじめに

中国工業合作運動（以下、「工合」運動）とは抗日戦争時期、日本の侵略に対抗する持久経済樹立を目的に1938年8月発動された協同組合方式の工業生産運動である。その特質は民主派が核となり、指導することで、国共双方の支持を受け、経済面での抗日民族統一戦線の一環として機能したことである。当時、工業合作社（以下、「工合」）は西北、川康、西南、東南、雲南5区、18省で国营、省営企業とともに軍需、民需品を生産して強力に抗日戦争を支援した^(注1)。現在、そうした「工合」運動の抗戦に対する意義への評価はすでに固まったと見てよい^(注2)。とりわけ、その中で発展したのは陝西省宝鶏を中心とする西北区「工合」である。たとえば、1940年6月の統計によれば、西北区の「工合」数は557社で、全国5区中、32.5%を占め、重慶国民政府等からの貸付総額も304万円で55.4%を占めている^(注3)。その業種は機器五金（「五金」とは金、銀、銅、錫、鉄を指すが、金属一般の名称としても使用される）、冶金、紡織、服装、化学、靴、食品、文化等、多岐にわたっていた。

ところで、抗日戦争時期、国民政府は重慶を核とし、西南、西北を両翼とする抗戦体制を敷いたのであるが、西南建設は国民党の強力な統制下で推進されたのに対し、西北建設は様相を異にしていた。西北区「工合」

は国民党地区、辺区、遊撃地区を管轄していた。すなわち、西北区の中心である陝西省は、国民党と共産党の接点という特殊な位置にあり、宝鶏は国民党統治区で、西安、成都、さらに蘭州を結ぶ線上にありながら、延安と近い。それは、共産党援助を指向する「工合」運動の創始者レウィ・アレー (Rewi Alley) の発想と、最高指導機関たる「工合」協会が行政院に組み込まれていたことが、アウフヘーベンされて必然的結果として宝鶏という地理的位置が選択されたといえる。国民政府としては、民主的生産組織であるが故に、共産党や回民（周知のとおり、イスラム系民族のことで、西北地方でかなりの勢力を有していた）とも友好状態にある「工合」に西北建設のヘゲモニーを与えざるをえなかったのである。かくして「工合」が国民党と共産党を結ぶ唯一の生産機構となることを可能にし、また同時に国民党のみに拘束されず、自主的運動を展開できた要因となった^(注4)。

国共内戦期も「工合」運動は継続されたが、「工合」指導者は強硬に「民主」を主張、「反内戦、反飢餓」運動にも参加するとともに、国民党一党独裁に対立、次第に共産党支持を強めていった。中華人民共和国成立後の1951年「工合」協会は中華全国供銷合作総社に吸収、合併され、52年には「工合」国際委員会も活動を停止した^(注5)。文化大革命時期には、抗日戦争時期の「工合」運動が国民党も支援していたことや、海外から献金を受けていたことから、「反動的」、「資本主義的」、「改良主義」、「外国のスパイ」等々非難され、旧「工合」関係者に対してさまざまな弾圧が加えられた。しかし、こうした空白期を経て1980年全国政治協商委員の胡愈之、朱学範、薛暮橋、薩空了ら30余人が「工合」回復提案をし、82年全国供銷合作総社、軽工業部、国家工商行政管理局が連名提案をし、その結果、83年に國務院に「社団」としての認可を受け、「工合」協

会（理事長・羅俊，副理事長・盧広綿等）が再建され、活動を再開した。1987年9月には「工合」国際委員会（主席・アレー，現主席は楊波，副主席・陳翰笙，盧広綿等）も活動を再開している。現在、「工合」協会は北京，上海，江蘇，甘肅，陝西，安徽，河南，広東，福建，江西，遼寧，吉林，海南島，浙江の14省市に分会，福州，蘇州，洛陽，新郷，膠州，安陽，松江，奉賢等に19支会を設立し，また，「工合」国際委員会は甘肅省山丹，山東省蓬萊，湖北省洪湖に「工合」実験区を建設している^(注6)。これらの中で最も経営がうまくいっているのが上海，河南各分会と甘肅省山丹の「工合」実験区と限られており，全体としては伸び悩みを示しているらしい。

筆者は，今回（1990年6月～91年3月）学術振興会の特定国派遣研究者に採用され，中国社会科学院の招聘を受け，10カ月間中国滞在ができることが決定して以来，西安に2カ月間滞在することに決め，その間に宝鶏を訪れることにしていた。前述したように，陝西省，とりわけ宝鶏は「工合」運動開始の地点として，きわめて重要な意味を持っている。そのためどうしても行きたいと思っていたのである。ただ，北京の「工合」国際委員会での話では，宝鶏では現在「工合」運動が行なわれていず，「工合」関係者もおらず，宝鶏自体も陝西省第2の大都会に変貌しており，当時の様子を窺うことはできず，「行っても無駄」との意見が大勢を占めた。が，抗日戦争時期の「工合」西北区弁事処，関係各機関の跡地に行き，また，宝鶏の地理的位置を考察，その発展状況を見ておくだけでも，「工合」研究を進めるうえで価値があると考えた。特に，盧広綿氏からは「工合」から継承，発展した大規模靴工場があると聞いており，抗日戦争時期の「工合」運動の解放後への影響，意義等を分析するためにも是が非でも行かねばならないと考えたのである。「工合」研究を始めてから10数年来，史料不足を補い，微細な事実までも知り，かつ「工合」運動を歴史の中で再構築し，その本質をよりビビッドに把握するため，筆者は，アレー，盧広綿，ニム・ウエールズ(Nym Wales)，陳翰笙，梁士純，秦柳方，彭沢益，張福良，千家駒，梁漱溟，鹿地亘各氏に対して，インタビュー，もしくは書簡で質問を行ない，幾つかの文章を発表してき

た^(注7)。しかし，これらの各氏は全国的指導者，関係者，および研究者等であり，「工合」運動研究を構造的に深めるためには，地方幹部や実際に底辺で抗日戦争時期の「工合」に参加し，労働，仕事をした旧社員，見習工に会う必要性があった。「工合」1社1社の内部，「工合」原則で定められている労働条件，福利等がどのように実施され，また彼らは「工合」とどのように関わっていたのか等々を具体的に知る必要があるためである。だがこれまで，こうした人々を探し求める術もわからなかった。今回は，まず盧広綿氏に「工合」協会陝西省分会・許維憲氏を紹介された。西安に着くと，すぐに許維憲氏に現在の「工合」運動に対するインタビューを申し込むとともに，抗日戦争時期，国共内戦期に西北区の「工合」運動に実際参加した人物はいないのか，もしそうした人物がいれば，是非会いたいという筆者の希望を出した。その結果，まず方逸民氏が紹介された。さらに許維憲氏から宝鶏市第二軽工局を紹介してもらい，かつ陝西省社会科学院の韓振乾氏の同行，援助を受け，宝鶏に向かった。第二軽工局は筆者の希望を受けて，「工合」の跡地，靴工場の参観，地方史家で『宝鶏史話』の著者・梁福義氏との会見のみならず，「工合」旧社員へのインタビューの按配もしてくれたのである。

質問は抗日戦争時期，国共内戦期，そして現在へと繋がる西北区「工合」運動の全体像，相互関連を明らかにすることを目指して組み立てた。とりわけ，「工合」運動が国共対立，資金不足，インフレのため，次第に停滞，減少傾向を示す1941年から史料も激減し，国共内戦期，中華人民共和国成立期の「工合」運動に至ってはその実状が全くわかっていないという有様であった。インタビューを通じて一歩でもこれらを明らかにすることに心掛けた。また，個別問題としてはそれぞれの人の略歴，辺区との関係，「工合」金庫，および旧社員，見習工から見た「工合」各社の状況，労働条件，社内民主化，経済生活，思想の変化に重点を置いて質問した。また，抗日戦争時期の「工合」がいかなる形態で中華人民共和国以後に展開するのかを知るうえで宝鶏製靴廠でのインタビューは有益であるし，現在の西北区「工合」に関するインタビューは以前の「工合」との組織的，理論的相互関連と差異を考察で

きるのみならず、全くと言っていいほど知られていない現在の「工合」の実状、「工合」と郷鎮企業等との関係を知るうえで貴重な資料となると考えている。

(注1) 「工合」運動に関しては、拙稿「抗日戦争時期の中国工業合作運動」(『歴史学研究』第485号 1980年10月)／同「遊撃地区の中国工業合作運動」(『中嶋敏先生古稀記念論集』上巻 1980年)／同「雲南省における中国工業合作運動」(『歴史研究』〔大阪教育大学歴史教室〕第24号 1987年2月)／同「東南区における中国工業合作運動」(『社会文化史学』第23号 1987年3月)／同「中国工業合作運動と救国会派」(『歴史研究』第25号 1988年3月)／同「陝甘寧辺区における中国工業合作運動」(『東洋史研究』第49巻第4号 1991年3月)を参照されたい。

(注2) たとえば、侯德礎「論抗日戦争時期的“工合”運動」(『四川師院学報』1983年第4期)／丁利剛「論中国工業合作社運動」(『社会科学』1983年第1期)／劉家泉「“工合”対抗日戦争的重要貢献」(『人民日報』1985年9月1日)等は、抗戦支援、難民救済、建設人材の育成、辺区経済への支援などの意義を評価する。ただし、地区別「工合」運動に関する研究はきわめて遅れており、今回とり上げている西北区に関しては、きわめて重要な地域であるにもかかわらず、李宗植「西北工合述略」(『西北大学学报』1983年3期)しかなく、同論文は、抗日戦争時期の「工合」を手工業と同一視するなど、問題も残り、実証、分析面でのより深い研究が不可避である。これらの論文に対する詳しい紹介、評価、批判は拙稿「中国工業合作運動の研究動向について」(『東洋史論』第7号 1989年)を参照。

(注3) 拙稿「重慶政権の戦時経済建設」(『歴史学研究別冊特集』1981年)。

(注4) 同上。

(注5) 申健「発揚工合伝統 推動工合事業」(中国工業合作協会編「“工合”在前進」北京 1989年)／拙稿「中国工業合作運動指導者からの書簡について」(『歴史研究』第23号 1985年9月)、等参照。

(注6) 1990年7月10日の秦柳方氏に対するインタビュー。この内容は別稿で発表予定で、現在準備中である。

(注7) 拙稿「中国工業合作運動について—レウィ・アレー、盧広綿両氏に聞く—」(『アジア経済』第21巻第5号 1980年5月)／同「中国工業合作運動の起源と現代的意義—ニム・ウエールズ女士からの書簡を中心に—」(『中国近現代史論集 菊池貴晴先生追悼論集』汲古書院 1985年)等。

I 西北区「工合」旧会計担当者・方逸民氏に対するインタビュー

(1992年1月30日 西安人民大厦)

(問) 略歴、およびいつからいつまで「工合」に参加し、どこでいかなる活動を行なったのでしょうか。具体的にお教えてください。

方逸民氏：私は1911年6月生まれである。江蘇省洛社郷村師範学校卒業後、小学校の教師をしていた。抗日戦争の勃発後、西安に避難した。西安では国民政府陝西省合作委員会弁公処で仕事をしていた。1940年3月宝鶏に行き、「工合」に参加した。西北区弁事処組織科の科員として統計工作を行なったのを皮切りに、50年4月末までずっと「工合」で仕事をしたのである。統計工作後、どのような仕事に就いていたかと言えば、まず宝鶏の「工合」金庫、蘭州の「工合」金庫の会計科長、その後甘肅省天水の「工合」金庫の經理、さらに宝鶏「工合」連社供銷処經理を経て、同地で大規模「工合」たる製革生産合作社を試験的に運営した時、經理であった。また、「工合」協会陝西省事務所主任も担当した。これらの工作を1950年4月末の事務所閉鎖まで継続したのである。現在、「工合」協会陝西省分会常務理事である。

(問) なぜ「工合」に参加されましたか。その時のお考えをお教えてください。

方逸民氏：「工合」は新たな形式の事業であり、抗戦に貢献できると考えたからである。当時、青年たちはこうした仕事をしたいと希望していた。私もそうであった。「工合」の気風はきわめてよかった。延安の気風や「工合」の気風は国民党の気風と全く異なっていた。「工合」は「吃苦耐劳」(苦勞に耐える)という新たな気風を持っており、国民党の腐敗した気風とは異なっていたのである。そこで私は合作委員会に辞めると言わずに西安を離れた。

(問) 「工合」協会西北区弁事処の機構、人員、資金についてお教えてください。

方逸民氏：当時、西北区弁事処の人員は非常に多かった。ただ、当時の統計がなく、言うことは非常に難しい。西北区弁事処は1938年開始であるが、その時私は「工合」に参加していなかった。参加後の状況を言

えば、弁事処は総務科、組織指導科、財政会計科等があり、その下に運輸処、婦女部、さらに軍用毛布処があった。大体の機構はこのようなものである。全体人員は時期によって異なるが、100～200人、1科当たり少なくとも5、6人はいた。

(問) 西北区弁事処の資金額とその配分方法をお教えください。

方逸民氏：弁事処の経費の一部は「工合」協会の管轄下に属するもので、弁事処の経費として発給された。事務費等であり、下の機構たる10事務所には具体的な必要に応じて配分した。たとえば、該事務所では年間何人の工作人員が働いているかによって、それにかかる賃金、事務費等を配分した。これらの資金は「行政指導」機構のために「行政事務費用」として使用するもので、末端の「工合」に使用する資金ではない。「工合」は自己生産、独立経営である。これらの資金配分は弁事処主任が決定した。

(問) 延安事務所の技術者・黎雪はご存じですか。

方逸民氏：この人のことはあまり知らない。養父のレウィ・アレーはよく知っている。ある時、アレーは甘肅省山丹でベイリー学校を運営していた(注1)。アレーから1944年に学校に来て総務科長に就任するように要請があった。私は行かなかったが……アレーは私にとっても良くしてくれた。

(問) 西北区弁事処と「工合」延安事務所との関係を詳しくお教えください。西北区弁事処は延安事務所になんらかの指導、援助を与えましたか。

方逸民氏：延安事務所は西北区弁事処所属の事務所の1つであり、なんらかの問題があると、それを弁事処が管理、指導した。弁事処は下部の事務所に困難があると、解決できるように援助したのである。たとえば、資金問題、生産問題。弁事処は人を派遣して援助した。当時、弁事処には技術科が設けられており、ここから人員を派遣し、生産面での問題を解決したのである。運営上なんらかの問題が生じれば、弁事処主任が見に行き、解決のため援助した。事務所が資金を必要とする時、弁事処が支給した。弁事処の資金源は1つは海外からの献金、さらに(「工合」協会等の)上部機関からの資金給付であった。このように事務所が資金を必要とする時、弁事処が資金の一部を与えたの

である。延安事務所成立後、共産党に対する援助は非常に大きいものであった。なぜなら、当時延安は(経済的に)立ち遅れており、市場の商品も全て国民党統治区から来たものであった。しかし、延安事務所成立後、数多くの「工合」が組織され、市場で必要な多くの商品が生産された。かくして、共産党も「工合」に非常に大きな支持を与えたのである。事務所は辺区になんらかの問題があれば解決できるように援助した。事務所レベルでは解決できない問題、たとえば資金、技術問題は全て西北区弁事処が解決した。ご存じのとおり、当時、弁事処下には10の事務所、すなわち延安、宝鶏、双石舗、漢中、安康、西安、鳳翔、天水、蘭州、さらに晋南にも各事務所があった(注2)。弁事処と事務所の関係は指導、被指導の関係であった。各事務所は各地区で西北区弁事処の代表として機能していた。延安事務所も同様である。一方で共産党の指導に従いながら、他方で業務上では弁事処の指導を受けていたのである。

(問) 延安事務所の人事はどのように決定しましたか。また、アレーが辺区に指導に行ったことは有名ですが、西北区弁事処員で、延安に行った人の名前を具体的にお教えいただけますか。国民党地区と辺区の自由往来はどの程度可能だったのでしょうか。

方逸民氏：種々の方法で行なったと思う。弁事処主任・盧広綿と副主任・劉大作の関係はきわめて良かった。ただ、彼らが延安に行ったか否かはっきりしない。当時、弁事処は延安事務所を非常に重視していた。なぜなら、そこは他所と異なり、共産党指導区域であったからである。そこで特別扱いし、とりわけ重視していたと言える。ただ、延安事務所の人事は彼ら自身が決定し、弁事処は人員を派遣しなかった。延安事務所の人員は大部分共産党員であった。この時期、延安事務所以外でも、うまくいっている事務所の主任の多くは共産党員であった。共産党が派遣し、「工合」に参加させたのである。共産党は「工合」を抗戦に有利な機構と見なし、支持していたからである。共産党は力量もなく、金もなかった。「工合」に対して人力上の援助ができただけである。私は彼らの仕事振りがきわめて良いと聞いていた。ただ、共産党員の「工合」参加は秘密裏に行なわれたため、私は「工合」で仕事を

している期間、誰が共産党員か全くわからなかった。当時、全国「工合」の中で西北区弁事処と共産党との関係がとりわけ密接であった^(注3)。

(問)「工合」金庫で勤められた期間が長いようですが、「工合」金庫関係史料が乏しいので、それぞれの「工合」金庫に勤められた期間、各「工合」金庫の組織機構、人員、資金、業務内容、年度別収支等についてできる限り詳しくお教えいただけますか。

方逸民氏：宝鶏「工合」金庫は西北区の総庫としての役割を果たすため、西北区で最初に設立された。その下に蘭州、天水、南鄭等の「工合」金庫が設立されたのである。私は宝鶏金庫には会計科長として1940年12月から41年3月まで勤めた。人員は8人であり、1万円前後の資金を有していた。蘭州金庫にはやはり、会計科長として1941年3月から42年2月まで勤めた。人員5人で創業費1万円である。天水金庫は経理として1942年3月から44年7月までであり、会計、出納、経理等、人員5人であった。「工合」金庫の機構は総務科、会計科等によって構成されている。業務は大体同じであり、預金、貸付、「工合」に代わっての代理収支、代理貸付、為替等であった。当時、類似機関として、陝西省合作委員会弁事処、農本局、農民銀行によって開設された合作金庫もあったが、これらは主に信用合作社に貸し付けていた。それに対し「工合」金庫は合作経済の金融機構という共通点を有してはいたが、当然「工合」に貸し付けるために組織された。その任務は各「工合」の預金、繰越金等を吸収し、資金を必要とする各「工合」に貸し付けることであり、目的は各「工合」の資金困難を解決することにある。もし「工合」金庫がなければ、銀行貸付に頼らざるをえず、手続きが面倒なうえ、抵当を必要とした。それに対し「工合」金庫の貸付は便利であり、円滑であり、かつ貸付期間を長くも短くもできた。のみならず、「工合」金庫の存在により資金の外流を阻止し、「工合」運動内で資金を回転させることを可能にしたのである。最も多い時で「工合」金庫に預けられた資金は100万円に達したと思う。ただ、年度別収支状況についての具体的な数字は残念ながら覚えていない。

(問) 1945年抗日戦争が終わりましたが、西北区弁事処はこれによっていかなる変化がありましたか。

方逸民氏：抗日戦争勝利後、西北区弁事処は陝西省事務所となった。人員は縮小し、僅かに主任、秘書、会計等5人となった。もう少し詳しく言うと、西北区弁事処は、1945年(抗日戦争勝利直後?)中国工業合作協会西北区輔導委員会となり、46年になって陝西省事務所となった^(注4)。西北区弁事処時代の主任は盧広綿であったが、輔導委員会主任は孟受曾に代わった。孟はすでに死去した。

(問) 中華人民共和国成立以後の、すなわち「工合」終了時期のことをお教えてください。

方逸民氏：「工合」陝西省事務所は1950(1951?)年5月1日当地の陝西省供销社宝鶏弁事処に移行した(吸収、合併された)。全国的規模で「工合」は全国供销社に移行したのである。1951年はまだ「手工業合作社」に属してはいない。

許維憲氏：当時、「手工業合作社」はなく、1955年以後「手工業合作社」は供销社生産処から分離して生み出されたのである。

(問) 旧来の「工合」西北区弁事処の人員で、後に供销社、さらに手工業合作運動に参加した人員はどのくらいいますか。

方逸民氏：まず私が供销社に移った。当時、私が陝西省事務所主任であり、事務所を代表して、「工合」の財産、檔案を供销社に引き渡すと同時に、私自身も供销社に移籍した。ただ、「手工業合作社」には参加しなかった。「工合」は「手工業合作社」とは何ら関係がない。また、軽工業部とも関係がなかった。1983年に「工合」が復活した後、軽工業部に依拠することになり、関係が初めて発生したのである。

(問) 旧来の「工合」で国営工場や大工場に発展したものがありますか。

方逸民氏：たとえば、宝鶏南関には製革「工合」があり、私はそこの経理をしていたことがある。解放後、宝鶏靴帽工場となった。その他、私は直接関係していないのであまりはっきりしないが、「工合」から「帆木綿」(ズック)工場となり、後に西安に移り西安「帆木綿」工場になったものがある。

(問)「工合」運動の経験、理論は手工業合作運動に何らかの影響を与えましたか。

方逸民氏：「手工業合作社」は別系統の合作社であり、

その点についてはあまりわからない。

許維憲氏：「工合」の優良なものは全国的にほとんど国営企業等に変わり、それゆえ、後の手工業合作運動は「工合」運動と断ち切られた形となり、新たに合作社を組織せざるをえなかったのである。

(問)「工合」の過去、現在、および将来における意義をどのように考えますか。

方逸民氏：「工合」は抗戦中、非常に大きな役割を果たした。解放後役割を果たすか否か、それはすでに明白な事実によって示されている。「工合」は復活し、今も存在している。その理由は「工合」が各種の生産合作社を組織し、商品生産を発展させ、「四つの現代化」建設を援助するからである。その他、過去「工合」は海外と多くの関係を有し、華僑との関係も深く、かくして統一戦線工作、祖国統一に積極的役割を果たした。それゆえ、1982年政治協商会議委員の幾人かは「工合」復活の議案を提出した。その趣旨は「四つの現代化支援、祖国統一促進」であった。後に国务院の指導者もこれに同意した。すなわち、「工合」は過去、現在、のみならず将来も必要なのである。中国「工合」は社会の商品需要に対して生産増大することができるからである。現在、郷鎮企業が勢いよく発展しているが、それらも合作社形式を採った工業の合作運動なのである。第二軽工庁も工業の合作運動を行なっている。すなわち、手工業連社は第二軽工庁に属している。さらに服务公司も行なっている。このように、「工合」協会を含めて4つの単位が全て工業の合作運動を行なっているのである。性質は同じである。これら兄弟単位の機構は異なるが、同じ工業の合作運動の工作をしている。「工合」に関して言えば、現存する最大の問題は国务院発布の「社団登記令」である。すなわち、「工合」協会が「社団」、つまり、「社会团体」の中に入れられてしまったのである。本来「工合」協会は「経済団体」であるはずであった。ここ数年来、国家は本来「経済団体」に属するはずの「社会团体」60余を再審査している。「工合」協会もその中の1つである。1989年以後、「工合」協会は「社会团体」に入れられた。「社会团体」は繁雑な登記の更新をせねばならず、かつ原則として企業を運営することができないことになっている。「工合」協会は生産合作社を組織、

運営することができない。それでは「工合」協会という機構は何のために存在するのか。この問題に関して、私は盧広綿に「どうすればよいのか。上部の人間と相談して欲しい」と、書簡を出した。この問題を解決できなければ、「工合」協会下にあるわれわれの分会は何もすることができず、この機構は存在意義を失ってしまう。この問題は非常に重要である。とはいえ、現在幾つかの合作社の発展を援助し、7、8の工場を組織し、「工合」陝西省分会に属する工農業開発総社を成立させ、さらに2つの「貿易商社」も有している。今、私は本当に「工合」の発展を援助したいと思っている。陝西の「工合」は他省に比して遅れていることが多い。すでに他省では60数社の「工合」が組織されている。現在「工合」が遭遇している問題は「工合」をうまく運営できないことにある。工商局に指導権を与えないことにある。この問題は将来国务院が解決しなければならない。甘肅はすでに登記した。しかし、(甘肅が)登記後依拠した計画委員会も企業を発展させることができず、ただ経済協力、技術指導が行なえるだけである。登記問題は陝西省のみならず、各省に存在する。現在、「工合」協会の上部にこの問題解決を担当できる人物がいないのである。本来、「工合」協会理事長・申健が行なうべきであるが、彼は体調が悪く担えない。その後、軽工業部長・楊波が「工合」国際委員会主席となったが、彼も行なえない。統一戦線部は「工合」の方針、政策、重要な人事の按配を管轄するだけ、軽工業部は業務指導だけというように、この問題を担当する所がないのである。結局、国务院批准の文献が「工合」を一般「社会团体」に含めているため、事態が好転しないのである。現在、国务院の「工合」に対する認識を改めるように努力している最中である。

(注1) ジョゼフ・ベイリー (Joseph Baili) (1861～1935年) はアイルランド出身のアメリカ籍宣教師。彼は中国には布教以前の問題が山積していると考え、南京金陵大学農科創設に尽力、また中国青年をアメリカのフォード自動車会社に送り込み、技術者を養成、さらに上海の労働者の子弟を対象に、技術訓練班を主催する等の活動を行なった。この思想、方法は抗日戦争時期の「工合」運動に引き継がれ、かつ彼を記念して技術者養成を目的とするベイリー学校が、1940年以降、江西省贛県、広西

省桂林、湖北省老河口、陝西省双石舖、河南省洛陽等に設立されたが、最も有名なのが甘肅省山丹のペイリー学校(校長・アレー)である。この卒業生には現在の中国石油総公司機械局副局長の張徳録等がおり、また学校は中華人民共和国成立後、蘭州石油技術学校となり、多くの石油関係技術者を養成した。なお、1990年「工合」国際委員会の提唱で山丹実験区の重要な構成部分として、山丹ペイリー学校それ自体が復活し、「半工半読」、「手脳併用」をモットーに、農村実用人材、「工合」の組織幹部、技術幹部の養成を再開している模様である。また北京でもペイリー職業大学(董事長・申健、校長・于北辰)が設立されており、現在2000人の学生が学んでいる(路易・艾黎研究室「艾黎自伝」蘭州 甘肅人民出版社 1987年164ページ/中国「工合」国際委員会編「工合国際通訊」第9期 1990年4月/「中国工業合作協会簡介」(『中国合作経済報』第259期 1988年11月12日)/拙稿「東南区における……」等参照)。

(注2) 延安事務所設立は1939年4月。なお、宝鶏の「工合」は元来、西北区弁事処が直接指導を行っていたが、「工合」運動が発展し、業務が繁雑になったため、1939年5月になって初めて宝鶏事務所が設立された(張法祖著 在上海日本大使館特別調査班訳「三年来支那工合運動の発展」1942年 46ページ)。

(注3) このように、共産党との関係も密接であったため、1941年1月新四軍事件以後、反共攻勢があり、宝鶏の「工合」に対しても弾圧を開始した。楊參政「工合在宝鶏」(『宝鶏県文史資料』第2輯 1984年9月)によれば、農曆5月宝鶏県政府は「軍統」(軍事統計局)。一般的には「藍衣社」と呼ばれる)に命令して馬營の紡毛「工合」の地下共産党員・章若夢、李懐信、李維州、喬積玉、および工作員の「李華」(漢中事務所主任の李華春の誤り?李華春はこの時期、国民党に殺害されている)を逮捕させ、西安の労働營に収監したという。また、1943年秋、陝西省政府はアレーと盧広綿が不在の時、宝鶏の彼らの弁公室と自宅を捜査している。

(注4) なお、楊參政 同上論文によれば、1945年抗日戦争勝利後、物価「跌落」(暴騰?)により、一部分の「工合」は生産を停止した。こうした状況下で宝鶏事務所は「工合」の調整を行なった。元来108社であった「工合」は業種に応じて23社に合併された。調整後23社の労働者は500余人、毎月の生産高は1億6000万元であった。

II 抗日戦争時期、国共内戦期の宝鶏「工合」 旧社員・見習工に対するインタビュー

(1991年2月20日 陝西省宝鶏市の
製靴工場の応接室)

(問) まず、生年月日と出身地をお教えてください。

劉東峰氏：江蘇省南京出身。現在80歳(1911年生ま

れ?)。

滑九思氏：私は河南人で、河南省澠池で1923年生まれ、現在67歳である。

劉俊愷氏：陝西省藍田県人。1920年生まれ。

楊徳厚氏：1932年4月10日陝西省涇陽で生まれた。

(問) 宝鶏に来たのはいつで、どこから来ましたか(注1)。

劉東峰氏：抗日戦争が勃発して南京から避難して来た。

滑九思氏：抗日戦争時期、私のいた所(澠池?)が日本軍によって陥落させられたので、12、13歳の時、宝鶏にやってきた。1939年のことである。

劉俊愷氏：1939年西安から宝鶏に来た。

楊徳厚氏：宝鶏には15歳の時来た。

(問) 「工合」に参加したのはいつですか。「工合」参加以前の仕事をお教えてください。

劉東峰氏：1939年8月1日成立の宝鶏美最時「工合」に参加した。「工合」参加以前、靴作坊の見習工であった。学校に行ったことはない。靴作坊で靴を作っていたのである。「工合」参加後、私は「経理」に選ばれた。「経理」といっても今の経理と異なる。当時の「経理」は何でもやらねばならず、公務、業務、さらに柴、米、油、塩までも管理していた。

滑九思氏：私が参加したのは実干第一製靴「工合」(注2)である。宝鶏にやってきた年である。それ以前は農民であった。

劉俊愷氏：1939年宝鶏に来るとすぐに「工合」に参加した。最初見習工であった。私の「工合」は「宝鶏県二里半村紗布生産合作社」が正式名称で、軍用毛布を製造していた。後に毛織物も織った。私は1940年には「工合」双石舖学校に進学して紡織を学んだ。「工合」参加以前、小学生であった。藍田小学校に通っていた。

楊徳厚氏：宝鶏に来てすぐに南関皮革「工合」に参加した。それは、一般に「宝鶏工業合作社南関皮革社」と称されていた。「工合」に務めると聞いて、知人たちは良い職場だと言った。「工合」参加以前、仕事はしていない。学校に行っていた。小学生であった。ただ、家は農家であったので、耕作の手伝いをしていた。

(問) なぜ「工合」に参加しましたか。

劉東峰氏：主に生活の保証である。元来、私は教育、文化がなかった。「工合」参加後、次第次第に文化的

影響を受け、種々のことを学習した。知識をもつと、ものの見方が変わってきた。自分のためだけでなく、大衆のことを考えるようになったのである。

滑九思氏：宝鶏は「工合」がとりわけ多く、農村から都市に至るまで「工合」が存在していた。都市にはタオル「工合」、機械「工合」、軍用毛布「工合」、農村には織布「工合」があった。なぜなら宝鶏は「工合」協会西北区弁事処の所在地であったからだ。「工合」金庫もあり、銀行と同じように「工合」に貸付を行っていた。「工合」の預金は全て「工合」金庫に預けたのである。宝鶏の全「工合」の資産はかなり大きいものであったのである。私は1人で宝鶏にやってきて、人に仕事を紹介してくれるように頼んだ。人々は「工合」で働くように勧めてくれた。なぜなら、宝鶏には「工合」が多かったからだ。当時（宝鶏に先に来ていた）兄が実干第一製靴「工合」で主任をしており、兄の紹介でこの「工合」で働くことになったのである。

劉俊愷氏：「工合」参加理由は仕事を求めてであり、若者には前途が必要である。宝鶏は抗戦時期工場が多かったので人に紹介してもらい、「工合」に加わることができた。

楊徳厚氏：「工合」に参加したのは生活のためであった。農村の生活は不安定で、収穫の良い時はよいが、悪い時は本当に苦しかった。ただ、「工合」がどのようなものかはあまりわからなかった。小学校の4年生だったから。

（問）「工合」に参加した時、社員は何人でしたか。見習工はいましたか（注3）。

劉東峰氏：労働者、見習工を合わせて計14、15人であった。ただ、私が参加した後、社員は毎年毎年増加した。割合は社員80%、見習工が20%くらいである。

滑九思氏：私が働き始めた時の身分は見習工であった。私の「工合」は見習工が多く、30～40人であり、社員は20数人であった。計50～60人である。

劉俊愷氏：私の「工合」は150人という大工場になった。参加した時、すでに100人あまりがいた。社員70人、見習工は子供であるが30人くらいいた。

楊徳厚氏：当時社員は30人、「練習生」は5、6人。私は「練習生」であった。私の「工合」では見習工とは言わなかった。

（問）「工合」に参加した後、生活は変化しましたか。賃金はどうでしたか。労働条件、福利等はどうでしたか。

劉東峰氏：当然変化した。安定した。賃金は出来高制であった。布靴1足を作る毎に2角、革靴の場合、1足毎に5角であった。たとえば、ある人が1日5足の靴を製造し、別の人が4足しか製造できないと、当然4足の人の賃金は低くなる。つまり、ある人は1カ月に50元、またある人は40元、さらにある人は20元しかもらえない。労働に応じて分配されるのである。幹部の賃金は2番目の人の賃金に連動した。賃金の1番高い人が50元、2番目の人が45元とすると、幹部は45元もらったのである。衣服は共用（「工合」所有）で、食事は無料であった。私はいわば労働者、無産階級であったので、「工合」に対する印象はきわめてよい。私が参加した「工合」の運営は順調に発展し、連合社となったが、それにも参加した。これに伴い、生活もよくなった。「工合」に参加せず、個人力だけでは私の人生は何らの進展も見せなかったであろう。「工合」参加後、思想は進歩し、生活は安定したのである。私は靴製作の設計、見積りができ、技術が高かった。靴のデザインがよく、すぐに売り切れた。原料入手うまく、さらに技術によって、技術が悪ければ10足しかできない皮から11足の革靴を作ったのである。かくして、賃金は往々にして他の人と比べて高かった。經理に選ばれ、解放の時までやっていた。皆が私を選んでくれたのである。よく仕事をしたので、「工合」がなくなると製靴廠で働き、最終的には宝鶏市第二輕工局で働いた。

滑九思氏：生活はよくなった。見習工は「単衣」（ひとえの着物）と綿入れが支給された。賃金は全て出来高制である。労働時間は8時間。時には残業もあったが、一部の人が残業するのではなく、全員で残業した。食事には金銭がいらず、集団で食事をした。社員会議ももたれた。福利に関してはタオル等が支給された他、宝鶏には「工合」医院があり、「工合」人員に奉仕しており、病気になっても心配いらなかった。

劉俊愷氏：生活は保障された。民間工場ならば1日15～16時間働かされたであろう。「工合」の労働時間は1日8時間であり、かつ勉強の時間もあった。自己学習である。朝起きると身体の鍛練の時間もあった。

賃金は初め銀元で3元、後に6元となった。やはり銀元である。一般に残業はなく、時に残業があった。残業は急ぎの仕事で、昼、糸の束を買いに行き、夜それを原料として軍用毛布を製造するなどであった。タオル、石鹼は支給され、食事は無料であった。週によって「大礼拝」（「礼拝」は「星期」、週と同じ意味）、「小礼拝」に分けられ、半月の休みもあった。休みの1日目は皆賑やかに集まり、御馳走を食べた。酒、肉、野菜が机一杯に並べられた。その時、呑みすぎてしまったことを今でも思い出す。私達の「工合」は酒工場に非常に近かったのだ。このように食事も改善されていた。

楊徳厚氏：変化は大きい。「工合」に参加することで生活は保障され、安定した。順調になった。当時、宝鶏には非常に多くの「工合」があった。たとえば、アルコール「工合」、毛布「工合」、小織布「工合」等々、本当に本当に多かった。私の「工合」もその中の1つであった。私は1946年から解放まで「工合」に参加した。労働時間は8、9時間。忙しい時は残業もあった。最初は「練習生」で靴作りを行なった。「練習生」の時は理髪費、洗濯費はもらったが、賃金はない。衣服は2年に1度支給された。食事は無料であった。皆一緒に食べた。料理人も社員であるが、専門に料理を作っていた。社員になってからの賃金は出来高制で一律ではない。やはり靴1足ごとに支払われた。多く働けば賃金は高い。私の場合、大体毎月同じくらいで、現在で言えば、5袋の小麦粉、まあ45元に相当する金額であろうか。学習面では「工合」の社章を学んだだけで、その他は何も学習していない。病気の時は「工合」医院で診てもらえ、医療費はかからなかった。

（問）参加「工合」に長所、欠点はありましたか。困難な時期、また順調な時期はどのようでしたか。また、生産物はどこで販売しましたか。

滑九思氏：私の参加した「工合」は開始時期やっと10人くらい集まっただけで大変だったと聞く。ただ、2年目、3年目と順調になっていった。自力更生であり、審洞^(注4)も自分で造らねばならず、現在と比べて条件は厳しかったが、「工合」の発展は速やかであった。もし「工合」が当時からずっと発展し続けていたら、現在でもやはり非常に速いスピードで発展してい

るであろう。当時、「工合」の生産物は生活必需品であり、さまざまな物が全て揃っており、他に求める必要がなかった。タオル、靴下等々、全て生産できた。いかなる業種も全てあったのである。先ほど言ったとおり、「銀行」（「工合」金庫）、医院まであった。

劉俊愷氏：何らの欠点もない。年末には利益配当もあった。民間工場にはもちろんこのようなものはない。「工合」が宣伝していたことは貧窮な人々にきわめて大きな吸引力を持っていた。私達の「工合」は上海から移転してきた紗布工場を基礎としている。私が参加する以前、創設時期の状況は大変だったようだ。盧広綿は鍋を背負って来たという。（宝鶏の）西関でかまどを築き、家屋を借りた。その時、ゆっくりではあったが、「工合」に貸付が行なわれ始めた。最初は7人で組織したのである。社員は1人1元出資し、かつ10元借りた。その当時宝鶏は県であった。私たちの「工合」の作ったのは全て「蘭帆布」衣裳であった。このようにしながら宝鶏では「工合」がかなりの規模で発展していったのである。

楊徳厚氏：当時、数多くの農民が農村から流出した。生活できなかったからだ。全て生活のため「工合」を組織し、「工合」に参加した。私が参加した「工合」もそうしたものだ。私の「工合」も順調であった。生産量は時期によって異なるが、靴で言えば、大体月2000足くらいだった。一般の小工場の生産物は質量とも良くなかったのに比して、「工合」の生産物は質量とも高レベルであった。靴、皮革、トランク等の生産物は宝鶏で売った。20、30人で製造しているわけだから生産量はそれほど多くないので、集中的に宝鶏で販売するだけで十分であった。

（問）「工合」参加後、思想的変化はありましたか。

劉東峰氏：私は「工合」經理訓練班^(注5)に入り、2カ月の訓練を受けたことがあるが、教育がなかったために、政治に対する理解は非常に乏しかった。訓練班に参加できたお蔭で、最後には經理のこのみならず、「私は全ての人のため、全ての人は私のため」の道理を理解した。後に、思想はまた変化した。「私がまず人のためにすべきであり、そうしてこそ人も私のためにやってくれる」と。

滑九思氏：「工合」は工業をうまく運営し、人の思

楊も一致し、人心を集めていた。組織機構も明瞭であった。幹部もその年よければ翌年も選ばれるが、よくなければ落選した^(注6)。こうした所があるということを知った。

劉俊愷氏：生活は安定した。思想の変化はない。その時私は幼かったから、よくわからなかった。「工合」での生活が当然と思っていた。

楊德厚氏：「工合」の気風は延安の気風と同じと言う人もいるが、私は国民党地区の「工合」と共産党地区では異なり、一概に言いにくいと思っている。ただし「工合」が進歩的社会团体に属していることは確かだ。そこに参加していたのだから無意識のうちに影響を受けていると思う。

(問) 抗日戦争時期の「工合」で最も印象に残っていること、および解放後の状況等についてお教えください。

劉東峰氏：最も印象に残っていることは、皆で力を合わせ、皆一緒に富裕になったことだ。一部だけが金持ちになったのではない。「工合」が存在する範囲は広く、そうした広い範囲で共同で富裕になったのだ。現在、私はすでに退職している。ただ、今の個体戸の奇形的発展に心を痛めている。蓄財の方法のある者だけが豊かになれ、そうでない者は豊かになれない。アメリカや日本の資本主義は発展しているが、もし労働者を大切にしないのなら、こうした資本主義も結局発展できないのである。もし「工合」を運営すれば皆で発展できる。誰でも「工合」に貢献できるし、誰でも「工合」の主任になれる。私は「工合」参加後、経理であったのみならず、ずっと主任でもあった。皆が選んでくれたからだ。製靴廠で働いた時も皆親切にしてくれた。私は金はないが、信望はある。どこに行こうとも歓迎してくれる。「万事人に頼らず、ただし皆一緒にやる」をモットーに生きてきた。

滑九思氏：「工合」に参加できて非常に光栄だと思った。メーカーになると、街中至る所に「工合」の人がおり、ある時は宝鶏の都市の半分が「工合」の労働者で埋め尽くされた。デモの時、全て「工合」の人々で威風堂々としていた。

劉俊愷氏：仕事が終わると、勉強した。「経理」(劉東峰氏のこと?)は私に対してもの見方を教えてくれ

た。そして、後に進学までさせてくれた。私はレウィ・アレーが校長をしていた(山丹)ベイリー学校の卒業生でもある。そこで4年間会計を学んだ。卒業後もベイリー学校に留まり、学生に教えたり、雑務をしたりした。同校の課程は多く、紡織、機械、衛生、会計、採鉱等の専門に分かれていた。

楊德厚氏：抗戦時期、「工合」は自力更生で仕事をした。現在、中央、省で「工合」が回復したにもかかわらず、あまり進展しないのは、政府に頼っているからである。一応、解放後の状況を説明すると、解放後「工合」は全て国家に移管した。すなわち1949年私の「工合」は南関生産合作社と称し、社員100余人であった。1951年省の人が来て正式名「宝鶏市第一製靴生産合作社」と名称を変え、私は引き続きそこで仕事をした。1951年に主任となった。1956年手工業連社となり、さらに58年合作制度の宝鶏製靴廠に改められた。現在、私は宝鶏市第二軽工局生産技術科長である。

(注1) 抗日戦争時期、宝鶏は隴海鉄道の終点として西北、西南を結びつける交通中枢という重要な位置にあったのみならず、三方を山で囲まれ、防衛という観点からも地形的に有利で、かつ1万8200平方呎の肥沃な土地を有していた。1937年七七事変後、「宝鶏地区」(宝鶏、および鳳翔、扶風、隴県、岐山、眉県等の周辺県を含む)には申新紗廠、福新製粉廠、大新製粉廠、雍興鉄工廠、雍興紡紗廠、三十一兵工廠等が移転してきたが、同時に大量の難民、産業労働者、手工業労働者が流入しており、「宝鶏地区」の人口は37年段階ですでに86万2083人に増大、抗戦後期には100万人を突破したという。宝鶏県城内の人口だけでも5186人であったものが9万8049人に膨れあがった(梁福義『宝鶏史話』西安 陝西旅遊出版社 1990年 331、336ページ等参照)。

(注2) 実干第一製靴「工合」に関しては、東亜研究所「支那工業合作社問題関係資料」第1巻 東亜印刷 1941年7月にもでている。それによると、この「工合」を開始した人物は(戦争のため?)一文なしとなり、菓子行商、街頭写真屋を経た後、金をため、技術養成所で製靴技術と文字を学んだ。しかし、結局難民となり、宝鶏に流れ着いた。そこで、失業者、「商売のない者」を組織して製靴「工合」を組織し、社員への靴製造の講習等も行なった。その結果、その商品は市場で最も良質で、最も廉価であったという(198~200ページ)。

(注3) 抗日戦争時期、「工合」内での見習工問題は、民主と平等を標榜する「工合」内での不平等、搾取・被搾取関係として議論の対象になっていた(拙稿「抗日戦

争時期の……)。実際どのようなものであったのか、社員、見習工から見てそれはいかなる意味を持つのか等の疑問を具体的に考察する材料を得るため、この質問を行った。

(注4) 周知の如く、窯洞とは西北地方の山崖等に掘った横穴式の住居、倉庫であるが、戦争中、防空壕と同じ効能を持ち、日本軍による何回かの爆撃にも大きな損害はでなかったとされる。鉄器「工合」に命中した時ですら、損失は100円で、60円で修復でき、爆弾の破片を集めたところ、100円以上の価値があったという(梁福義前掲書 333ページ)。

(注5) 経理訓練班に対する史料が見つからないので、「下級合作指導員の不足」打開目的で設立された宝鶏の「合作指導員訓練班」を紹介しておこう。第1期(2カ月)30名の高中卒程度の青年を集め、合作原論、合作社指導法、工場管理、会計常識を学ばせた。半分は教室での学習、残る半分は「工合」での実習であった(「中国工業合作協会西北区弁事処工作報告」[刈谷久太郎「支那工業合作社運動」 畝傍書房 1941年] 77ページ)。

(注6) 「工合」の理事、主席は公選であり、不正があれば社員、監事は弾劾案を提出し、直ちに免職することができた。これは民権主義の実際の運用であり、社員の政治参加の初歩的訓練とみなされていた(拙稿「抗日戦争時期の……」)。

III 「工合」発展形態としての大規模集団工場・宝鶏製靴廠

——工場長・屠仕碧氏へのインタビュー——

(このインタビューは旧「工合」社員へのインタビュー後、続けて行なわれた)

(問) 宝鶏製靴廠と「工合」の関連をお教えてください。

楊徳厚氏：私の方から簡単に紹介すると、1946年美最時製靴「工合」、実干第一製靴「工合」、南関製革「工合」3社が合併して、宝鶏南関製革生産合作社となった。さらに1958年宝鶏市第一製靴社、第二製靴社、第三製靴社が合併して現在の集団所有制、すなわち大規模合作制度形態の宝鶏製靴廠となったのである。

(問) 「工合」の継承、発展を考えるうえでも、「工合」の歴史的意義、評価を考察する際も、重要と思われれますので、宝鶏製靴廠の具体的、かつ詳細な状況についてご紹介ください。

屠仕碧氏：われわれの工場は元来「工合」の存在した場所に建設された。劉東峰、滑九思、劉俊愷、楊徳厚各氏はこの工場の出身者である。数十年の変遷を経

て工場は小から大に変わった。主に第二製靴社から来た劉東峰主任がこの工場の基礎を築いた。現在も滑九思氏は業務、劉俊愷氏は会計を担当してくれており、この工場の現役である。劉東峰主任と楊徳厚科長はこの工場から宝鶏市第二軽工局に異動した。私がこの工場に入ったのは1962年のことである。当時職工は170～180人しかいなかった。1964年一部の帽子製造の同志が分離、独立し、服装廠を成立させたが、われわれの宝鶏製靴廠は発展を続け、現在すでに職工457人、退職労働者131人、固定資産600万余元、純利益は400万余元となっている。昔の合作社時期1カ月数千足しか生産できなかったが、現在は月に数万足、年間100余万足に上っている。1990年の年生産は181万足に達し、生産額は960万元であった。面積は元来6畝8分の2(4166平方に余)であったが、現在10畝(6667平方に)以上となっている。工場が発展した後、このビル(インタビューをした応接室のある3、4階建てのビルのこと)は上級機関(宝鶏市第二軽工局)からの42万元の支出によって設立できた。その他の工場となっているビルは全て自己資金で建設した。かくして、今はもう「工合」時代の様子から一変しており、当時の様子を見いだすことは不可能である。ただ、「工合」時代に生産した地皮が残っている。劉(俊愷)会計と滑業務に持って来て見てもらいましょう。退職者は全て今も工場の「老元首」として扱われている。現在劉会計と滑業務は現役で最後の旧来からの古参の人々である。工場が迅速に発展できた要因の1つは「工合」のよい伝統を継承したからである。つまり「工合」の共同で仕事をし、一方で生産をし、一方で建設するという伝統を受け継いだのである。まず、従来の土法的やり方で重要な仕事から着手し、露天の日除けのようなもので、従来の設備を利用して開始したが、現在は全てビルに変わり、新設備に一変した。とりわけ発展したのは1970年以降である。この時、400～500人となり、現在全工場の総人数は600人余となっている。生産物は半長靴、各種布靴、各種革靴である。現在我々の工場は870平方にの商場も運営している。まず、工場を運営し、その後商店も運営しているのである。劉会計はすでに72歳であるが、商場で仕事をし、滑氏も商場の業務主任である。つまり工場内に2つの「分廠」

が設けられており、1つは商場、1つは布靴製造工場である。われわれの工場は技術、管理両面で陝西省の同業者の中で先頭を歩んでいると見られている。1987年以降、6製品は「省優秀」、1製品は「部門優秀」を獲得し、2種類の運動靴は全国品評会で「金鷄賞」に輝いたのである。つまり質量的に認められていると言える。この企業は宝鶏の大手企業と目されている。もちろん集団企業中では大企業である。「双文明」（精神文明、物質文明？）建設中、何度も上級関係部門の表彰を受けている。すなわち、われわれの工場は陝西省経済委員会の検査で質量とも合格した「管理単位」であり、「区文明」の工場である。こうした成果をあげることができたのは、ここに同席していらっしゃる劉東峰、滑九思、劉俊愷、楊徳厚各氏ら先輩のお蔭であり、さらに後来者の共同努力の賜物と言える。この工場は基本的に「工合」思想を保持しており、福利面でも「工合」の伝統を継承している（注1）。

（注1） 福建、広東の旧「工合」の幾つかも大工場になっている。たとえば、1つは5万のトラック製造工場（労働者2000人）であり、もう1つはエア・コンプレッサー生産工場（労働者3000人）であり、ここには抗日戦争時代の「工合」の旋盤が展示されている（拙稿「中国工業合作運動について……」）。

IV 現在の陝西省の「工合」運動

——許維憲氏に対するインタビュー——

（1991年1月30日 西安人民大廈）

（問）生年月日と出身地、略歴等をお教えてください。

許維憲氏：1933年山西省洪洞縣蘇堡鎮茹去村で農民の家庭に生れる。1948年中国人民解放軍に参加。1956年陝西省手工業管理局に転職。1984年「工合」協会陝西省分会が活動を開始すると、そこに異動した。現在陝西省分会弁公室主任をしている。

（問）「工合」協会陝西省分会復活、成立の経過と指導部の陣容等についてお教えてください。

許維憲氏：陝西省分会は1984年7月16日陝西省政府の同意の下で復活、成立した。10月会員代表大会を開催し、理事会の人選をした。そして35人の理事を選出した。名誉理事長は孫克華、理事長には李永林が選ばれた。孫は当時陝西省副省長で、現在人民代表大會常

任委員会主任で、李は元陝西省第二輕工庁長で、省政協常任委員である。さらに3人の副理事長には第二輕工局長・郭広明、労働人事庁副庁長・王栄昌、供銷合作社責任者・李元農が就任した。さらに方逸民、趙伯祥、滕秉坤が常務理事である。方、趙、滕3人は抗日戦争時期、「工合」運動に参加していた。名誉理事長を除く計7人で常務理事会は構成されている。この他、康健生ら7人の顧問がいる。代表大会ではまた省「工合」章程を採択した。陝西省の「工合」工作は全てこの章程に則って行なっている。省分会はさらに理事長弁公室会議制度を作った。この会議の構成員は業務を主として担当する人々で、たとえば弁公室主任、企業発展部長等がその中に含まれる。とは言っても日常業務をしている省分会の工作人員はわずかに2人だけである。1人は私で、弁公室内の工作に責任を持っている。その仕事は「上意下達」である。つまり北京から来た指示を下に伝える仕事である。もう1人は企業発展工作に従事している。省分会の人数は少ないので、お互いに相談して事を処理している。われわれ2人も元来、第二輕工庁に属している。そのため、経費は第二輕工庁が支出している。われわれの賃金、福利活動等の経費も第二輕工庁工作人員という範囲内で支給されている。省には「工合」協会の分会組織があるだけで、「工合」国際委員会のそれはない。ただこの両上部機関からの指示は全てわれわれの所にひとまず集約され、その後各「工合」等に伝達するのである。「工合」協会は国内的、国際委員会は対外的なものであるが、私の理解では国際委員会と「工合」協会は1つの組織である。ただ工作の重点が異なっているにすぎない。

（問）陝西省における「工合」協会陝西省分会の組織機構と「工合」運動の現状、すなわち社数、業種、資金、持株等について具体的にお教えてください。

許維憲氏：現在、陝西省の「工合」運動を指導する機関は陝西省分会、西安市分会、蓮湖区支会の3つがある。3つとも西安にある。省分会が直接、上部機関たる「工合」協会と連携している。元来、「工合」章程の規定によれば、省には「分会」、市県には「支会」が設立されることになっている。では、なぜ西安市のものが西安市「分会」と称されるかと言えば、中国経済計画の中で単独で指名された重要都市だからである。

陝西省には5つの合作工場があり、そのうち、西安には3社ある。「工合」各社の構成員は退職した元労働者、元技術人員、および知識青年である。その設立は「工合」組織（分会、支会）の補助、指導によるものである。たとえば、「工合」設立時に、まず技術人員の有無、資金、土地、設備の有無等について審査する。さらに生産物の市場、原料入手先、販売についても簡単な調査をする。この結果、「合格」と認めた場合、工商局と連携し、工商手続きを行なわせる。われわれは、「工合」成立後、貸付について銀行と交渉する。分会の仕事は大体このようなものである。つまり「工合」を成立させ、補助、指導し、運営できるようにさせるのである。「工合」5社の業種は化学、裁縫、メーター、機械、金属部品である。たとえば、機械「工合」は小型機器、すなわち建築用ドリル等を製造している。株式の額面は、「工合」によって1株1000元もあれば50元もあるというように一様ではない。ただし持株数に限界はなく、10株購入してもよいし、20株購入してもよい。もしも持株数を大きく定めすぎた場合、たとえば1000株と規定した場合、見習工は資金を調達できなくなる。

（問）持株数に限界はないとおっしゃいましたが、「工合」1社全体の資本額、株金総額に対して社員個人の保有持株の限度は規定されていないのですか（注1）。

許維憲氏：「工合」は集めた株金を資金に生産を行なっている。つまり、たとえば、ある「工合」は社員が10人とすると、「工合」全株数は100株とすることができる。そうすれば、少なくとも1人1株が義務づけられ、多くとも1人50株となるであろう（持株限度額50株？）。ただし、持株数にかかわらず「工合」内の選挙権は1人1票だけである。西安地区の「工合」社員の月給は手当、ボーナスを含めて一般に130元前後である。これは西安の一般労働者の標準より高い。また、「工合」労働者の賃金は「工合」管理者の賃金より高い。なぜなら、労働者のそれは能率給であり、出来高制を採っているからである。

（問）持株に対する配当はありますか。また株を購入しても労働に参加しないという例はありますか。

許維憲氏：株による分配と労働による分配を実施している。ただ、株だけを購入して労働に参加しないと

いうことはできない。とは言え、「工合」内には賃金だけをもらって株を購入しない者もいる。たとえば技術人員がそうである。彼らは「工合」社員ではなく、「工合」内で幾つかの技術問題を解決できない場合、雇う形で来てもらっているからである。

（問）各「工合」内の資金配分は具体的にどのようなになっているのでしょうか。

許維憲氏：「工合」内での利益配分は、(1)共同基金30%前後、(2)株式配当金15%前後、(3)労働賃金とボーナス10~15%、(4)「公益金」、すなわち社会保険、人材育成費、福利、および社会活動費が10~15%、(5)董监事会費用と工場長賃金5%、(6)「工合」事業資金5%となっている。

（問）現在「工合」の資金は十分ですか。抗日戦争時期の「工合」は華僑からの資金面での支援がありましたが、今はどうでしょうか。

許維憲氏：「工合」の資金はかなり少なく、貸付も容易ではない。こうした状況下でも遊休資金を集めることは可能だ。ただ問題はこれらの遊休資金は基本的に個人所有の金であり、これを借りた場合、その利息が銀行よりも高いことである。しかし、「工合」の資金不足を補うために遊休資金に依拠せざるをえず、基本的にこれら個人の金銭を借り集め、「工合」に貸し付けているのである。現在は華僑からの資金援助はなく、国内、個人から集めている。

（問）「工合」に対する税金についてお教えてください。「工合」は合作社ということで税制面での優遇はありますか。

許維憲氏：「工合」は原則的に完全自治であり、各方面は干渉できないことになっている。ただし、国家の政策に基づいて運営し、税金を支払い、義務を果たした後、それが認められる。合作社優遇税はあるが、基本的に郷鎮企業と同様である。「工合」内に待業青年が何人いるかによって優遇率がおおきく決まってくる。現在、陝西省の「工合」の力量は比較的小さく、また思うように進展していない。それには、それなりの背景がある。なぜなら、現在の「工合」協会は「工合」指導者、幾人かの「工合」事業に熱心な人士、および中国の手工業者が自ら発起して組織した「民間社会団体」(注2)である。つまり自主管理を目指して「民

間性」を強調した。その結果、逆に中国における合作事業の大潮流の中で微小なものとなってしまったのである。抗日戦争時期、「工合」協会が工業の合作社を一手に引き受けていたのと異なり、今は工業の合作社を行なうその他の機関が存在する。すなわち、「工合」協会以外に軽工業部、労働服务公司、郷鎮企業局の3つがあり、これらの力量はきわめて大きい。工業の合作社全体としては発展しながら、「工合」協会下の「工合」は伸び悩んでいる。労働人民は大企業や官営企業に行くことを望んでいる。これらは人力、財力とも充実し、管理もよく、優位に立っているからである。われわれの「工合」は前に述べた3機関に及ばないのである。これらは省、地区、県、区、郷鎮に全て組織網を持っている。そのうえ、「社团」登記問題も未解決である。ところで、「工合」と軽工業部は兄弟関係にある。業務上、「工合」に指導と援助を与えている。なぜなら、建国後、1951年旧「工合」が廃止されて以後、工業の合作事業は軽工業部の管轄下にある期間が長かった。すなわち、1950年代軽工業部が手工業合作社を推進したのである。その結果、軽工業部は手工業合作方面にかなりの経験を持っている。この時期、軽工業部は城鎮、すなわち大都市、小都市、鎮で手工業合作社を指導した。これら1950年代の手工業合作社は一步一步昇級して、大部分国営企業となった(注3)。郷鎮企業局は成立後、期間は短い。その工作力量は農村地域の郷鎮に向けられている。第二軽工局の力量は都市、および鎮に向けられている。つまり鎮が第二軽工局と郷鎮企業局の交差点となっている。かくして、鎮の郷鎮企業、すなわち工業の合作社はある部分は第二軽工局、またある部分は郷鎮企業局の管轄下にあるという形態をとっている。では都市はどうか。都市は第二軽工局の管轄下にあると同時に、労働服务公司が工業の合作社を設立し、基本的に都市を舞台に活動している。服务公司は国営ではなく、「集団」組織ではあるが、国家機関人員の子弟、都市工場人員の待業子弟に仕事を按配するために組織された機関である。中国では集団事業も国家の統一計画によって動いているために、服务公司もかなりの力量を持っている。当面、郷鎮企業局下の工業の合作社の発展が最も速い。なぜなら、郷鎮企業局は中国政府の管轄下にあり、政府資金を借

りことができ、活動範囲も広く、かなり自由に運営できるからである。こうした観点から見ると、「工合」協会だけが完全な民間で、基盤が脆弱なのに対し、その他の3機関は基盤がしっかりしている。その結果、「工合」協会が工業の合作事業で占める位置はかなり小さいものになってしまっているのである。「工合」協会は「民間社会団体」と規定されている。「工合」協会の再建は中国政府の批准によった。今、政府民政部は「社团」管理处を成立させた。この結果、「工合」協会を含む社会団体、すなわち「社团」は管理处に登記しなくてはならなくなった。昨年(1990年)「工合」協会も管理处に登記した。「工合」協会と政府との関係は以下の通り。「工合」協会は成立直後にすでに政府の批准を受けているにもかかわらず、現在、管理处に登記が認められてのみ、運営できることとなった。軽工業部は人力、財力、事務等の方面で「工合」を支えている。つまり、「依存関係」にあるのである。われわれ省分会はなんら支出もしていない。陝西省の場合、第二軽工庁が出している。省分会成立時期に、省政府は3万5000元の活動経費を支給してくれた。今までこの資金は基本的に使用していない。ただ問題は基層にある「工合」の経営がうまくいかないために、2000~3000元借金しなければならなかったことである。当然、「工合」各社から資金は徴収していない。「工合」各社に徴収できる余剰の金銭はないのである。

(問) 先程から軽工業部、第二軽工庁、第二軽工局という言葉が次々でていますが、これらの相互関係はどうなっているのでしょうか。

許維憲氏：同系列のものである。簡単に言えば、軽工業部は(省レベルでも?)国営担当の軽工庁、合作社、集団工業担当の第二軽工庁に分かれる。その下、縣市レベルには第二軽工局がある。

(問)「工合」協会、軽工業部、郷鎮企業局、労働服务公司下の工業の合作社、郷鎮企業は組織原則や内容面で違いはないのですか。全く同じものと考えてよいのでしょうか。

許維憲氏：工業の合作社の組織原則は、自発的結合、資金の自己調達、自主経営、労働に応じた分配、共同基金の積立、理にかなった株の利益配当。労働服务公司、郷鎮企業局、「工合」協会、第二軽工局は全てこ

の原則で運営している。つまり、この4機関とも工業の合作事業を行なっているのである(注4)。

(注1) 抗日戦争時期、「工合」社員は一律に1株(2元)以上の株を持たねばならず、同時に個人の「工合」支配を阻止する意味からも、持株は各「工合」の全株金の20%以内に厳しく制限されていた(拙稿「抗日戦争時期の……」)。

(注2) 1988年12月「工合」協会第2次理事拡大会議採択の「中国工業合作協会章程(試行)」(中国工業合作協会編 前掲書 22ページに所収)の第1章第1条では、「工合」は手工業、「工合」工作者、および合作事業に熱心な人士と組織が自ら願って結合した「民間社会経済団体」と規定し、1986年7月国家経済委員会は69(の団体)が全国的な「社会経済団体」であることに同意し、「工合」協会はその中の第21位にある(同上書 43ページ参照)。これを見る限り、「経済団体」としての認定も受けているようであるが、許維憲、方逸民氏の話に合わせて考えると、この後の推移の中で、「社会」と「経済」が切り離され、「工合」は「社会团体」とされてしまったようである。

(注3) 宝鶏製靴廠は発展しても集団所有制を採っているが、一般的に優良な「工合」、手工業合作社は国营企業に格上げされたため、合作運動の側面から見れば、集団所有制としての発展が保証されず、結果的に中国経済の硬直化を招いたと考えられる。

(注4) 現在の「工合」は株の保有率等以外の組織原則、民主化等、抗日戦争時期の「工合」のそれを踏襲している。つまり、現在の郷鎮企業を含む工業の合作社の

起源、手本は、意識的にしろ、無意識的にしろ、抗日戦争時期の「工合」である可能性があると考えられる。ただ、「工合」運動は最も長い歴史と伝統を有し、工業の合作社自体が発展しているにもかかわらず、中華人民共和国成立後、長期にわたる空白がたり、軽工業部、郷鎮企業局、労働服務会社の活動の中で、むしろ後進としての地位に甘んじざるを得ず、オリジナリティを出せず、伸び悩んでいるようである。そして中国政府自体、他機関による工業の合作社が発展している以上、「工合」協会が合作社を組織することよりも、「社会团体」として独自に有する国際関係、および山丹等でのよりよい合作社創出のための「実験」に期待をかけているのかもしれない。とは言え、全ての「工合」が低迷しているわけではなく、上海等の「工合」は発展している。たとえば、上海には日本やフランス等との海外貿易を行なっている「工合」春蕾手袋廠があり、また「工合」広告公司のように柔軟に新たな方向を模索しているものもある。なお、1991年3月、上海市分会、松江県支会、および春蕾手袋廠でもインタビューをしている。この内容についても機会を見つけて公表したい。

(大阪教育大学助教授)

〔付記〕 今回、陝西省社会科学院・韓振乾氏、同通訳・楊曉媚氏、「工合」協会陝西省分会・許維憲氏、宝鶏市第二軽工局の方々、および宝鶏市外事弁公室・王嘉澍氏にはとりわけお世話になった。謹んで謝意を表したい。